

Gail Hinich Sutherland,
THE DISGUISES OF THE DEMON

-*The Development of the Yakṣa in Hinduism and Buddhism*-
 State University of New York Press, Albany, 1991, 215 pp.

富澤 かな

ごらんのとおり、インドのデーモンに関する著作であるが、この著作の主人公たるヤクシャはデーモンと呼べるかどうか微妙な存在である。ヤクシャは必ずしも悪の性質、デーモン性を示す存在ではなく、しばしば肯定的な面を多く示す存在である。デーモンのようにデーモンのようにない。否定的なように肯定的。恐いけれど優しい。そのような微妙な存在であるヤクシャを“デーモン”として研究することは、インドの「悪」、転じて「正」の意味を問う作業に連なってゆく。

ヤクシャを主人公にインドのデモーニッシュなものの意味を問うこの著作の背後には、まず、Ananda Kentish Coomaraswamy の *Yakṣas* (1928-31) や Ram Nath Misra の *Yaksha Cult and Iconography* (1981) などの、ヤクシャという特殊な存在の図像学的・文献学的研究の流れが見えるが、同時に Wendy Doniger O'Flaherty の、*The Origins of Evil in Hindu Mythology* (1976) などの研究の大きな影響が見いだせる(本書は実は O'Flaherty が編集するヒンドゥー研究の叢書の一冊である)。ヤクシャに関する概説本のように見えて、この書の射程は実は広い。ヤクシャという微妙な存在を解明せんとする興味。「悪」の意味するところへの興味。さらに、ヤクシャという好素材で、シンボルの形成から展開、安定への“ライフサイクル”を抽出してみせようとする、シンボリズムへの興味。そしてヤクシャという周縁的なマイナーな神格を、インド思想史の大きな文脈に位置づけようとする(逆に言えばヤクシャを通してインド思想史を再考しようとする)興味—つまり小伝統への視線から、大伝統の問題、正統の形成の問題を浮き上がらせようという興味。大いに野心的なこの著作の成果やいかに、ということで、以下内容を概観してみよう。

*

著者は冒頭でヤクシャの複雑さ、多面性を指摘し、多面的アプローチの必要を主張している。言に違わず、その研究は時も分野もアプローチも実に広くにわたっている。

まず第1章。ここではヤクシャの本質に関わるエレメントとして水を取りあげ、水を通してヤクシャの意味に迫り、さらに水を媒介としてヤクシャと結びつく多くのもの・神格・デーモンを取りあげ、そこからさらにヤクシャの性質を浮き彫りにしようとしている。水は、ヤクシャの性質の核とも言えるその両面性を示す。そこには、世界が秩序だって分かれたれ生成されるその以前の、すべてををらむ聖なる“cosmic water”のイメージがある。この水が全てを生み出す。水は生成の動因なのである。水は生み出す力と破壊する力とを合わせ持つ。生と死の二面性がある。

そして水を媒介に、木、蓮、瓶、マカラ（ワニのような伝説上の水棲怪獣）、ナーガ、魚などが、相互に関わり合ってヤクシャとからむシンボル体系を形成している。悪鬼的なラクシャサやピシャーチャ、天人に近いガンダルヴァなどは、水、豊穡（富）との関係、むさぼり食う消費の性質や、価値あるものを守る性質、あるいは性的な面や、マーヤー（幻）的な惑わす性質などをヤクシャと共有している。ヤクシャの王とされるクベラ神は富と地の守り神である。福の神的でありつつ泥棒の神であるなど、負の性質も持つ、やはり両面的存在である。守りと試練の機能を示すのもヤクシャに通ずる。ここで注目すべきは、ヤクシャのデーモン性はその「水」的性質＝両面性（に含まれる負の成分）に端を発するものである、という次章につながる主張である。

第2章。ヒンドゥーイズムにおけるヤクシャ、ということ、初期のヤクシャの概念の変化を時間に沿って追っている。さらにその過程を、「水」と関わる神であるヴァルナ神の意味の変化と重ねて理解を深めている。そもそもヤクシャはヴェーダにおいてはデーモンではない。人格性すらはっきりせず、宇宙樹のように描かれたり、抽象概念であることもある。「存在」としか訳し得ないことが多い。創造因に関わり、それゆえ未分化の混沌や神秘性を示す。このような包括的な、全的なヤクシャイメージはブラーフマナやウパニシャッドにも受け継がれるが、それはブラフマン概念と同一視され、取り込まれ、その全体性をブラフマン概念にもってゆかれ、自らは矮小化の方向に向かった、とされる。この矮小化にあたっては、その両面性の内の半面、神秘的な闇の面のみがピックアップされていったものと見られる。ヤクシャのこの栄光と没落の過程はヴァルナ神と共通する。ヴァルナはヴェーダにあっては天則（リタ）を司る厳格な大司法神であるが、次第にデーモン性を示し、力も落ち、ただの水天になる。この没落の核には、そもそもの両面性、全的であるがゆえに負の要素も内包するその両面性がある。またそのリタの守備範囲もあまりに広く包括的であるからこそ、分裂→矮小化の過程に進んでしまった。リタは3レベルに及ぶ。自然・宇宙の物質的秩序。供犠の正しい実行。社会道徳。最高存在としてあらゆるレベルにわたり矛盾なく法をもって統べることの困難さがここに見て取れる。この問題意識は第3、4章に関わってくる。

第3章。ヒンドゥーと仏教のテキスト（具体的には叙事詩とジャータカ）に見られる水辺での試練のモチーフが取りあげられる。英雄や菩薩が水辺で、水域を統べるナーガやヤクシャなどのデーモンと出会う。そして思慮たりず危機に落ちた兄弟と自分の命とをかけて、その謎かけ（ダルマに関する高度な問い）に見事こたえ、その法の力でデーモンをくだす、というパターンの物語である。著者はこれを、王のダルマの獲得のモチーフと見る。王が維持すべき秩序には二つのレベルがある、という。超越的で精神的で普遍的な“モラル・オーダー”と、地上的で物質的でローカルな“ナチュラル・オーダー”とである。地の王である以上、この自然の物質的な面にも及ぶダルマを行使せねばならない。この要求はヴァルナのリタが自然と（儀礼と）道徳とに及ぶものとされていたことと呼応する。統治者が真に全ての王たるためには、両面性が必要なのだ。そこで菩薩やユディシュティラは、地の力・ローカルな力を掌握する周縁の存在たるデーモンと対峙し、これに勝利して、その力を取り込みかつ制御せんとするのである。この問題において、ヴァルナの分析がつながりを見せたように、クベラの分析も新たな意味を持つ。クベラは異母兄弟であるラーヴァナと対立する。この対立にパーンダヴァ五王子とカウラヴァ百王子の対立が呼応する。また、同じく異母兄弟問題に悩むラーマはラーヴァナを倒すことで象徴的に問題を解決

する。この「試練」の神話でも、菩薩とユディシュティラは、異母兄弟と同母兄弟双方を含む何人かの兄弟の内だれを助けるか、という問題に直面する。王たるものは血の問題に如何に処すべきか、というこのテーマは、超越的かつ地上的であるべき王の法の二方向性の一つの焦点を示す。ユディシュティラの模範解答は、血のつながりの濃さを犠牲にし、二人の母に平等に息子が残されるようにとの愛と正義をもって異母兄弟を選ぶ、というものだ。これは単に血＝物質性を捨て大義を選ぶ、という意味ではない。平等な思いやりがあるからこそ血の犠牲も選択可能になり、結局は兄弟全員が救われることとなるのである。つまり両方の法が、モラル・オーダー先行で統一的に実現する状態であり、この統一をもたらす維持するのが王のダルマなのである。ここに、没落したヤクシャやヴァルナのかつての両面性の栄光が、彼らとの出会いと勝利の装置を経て新しい王の身に再構成される様が見て取れるのだ。

第4章。仏教とジャイナ教におけるヤクシャの扱いがテーマである。第3章と似たテーマで、ブグダとヤクシャの対立→ヤクシャの回心のモチーフが大きく扱われる。ヤクシャはやはり物質性の象徴であるが、その意味はまた別の深みを示す。それは宇宙観の違いによる。ヒンドゥーの宇宙が秩序の顕現として肯定されると違い、仏教の宇宙論では、物質的な宇宙の生成は純粋な状態の物質への墮落、として否定される。よって本来純粋な知覚、精神の、物質性からの脱却によって、この悪しき展開を転倒させることが求められる。この転倒の象徴となるのが、物質性の象徴たるデーモンの回心なのである。また、原始仏教は一方で知的革新であるとともに一方で社会の刷新をも意味する。知覚の変革によって世界を変容させるし、もっと現実的には、カースト制を基盤とする社会体制を否定して新しいヒエラルキーの樹立を志向するものである。だから、アンチの存在、周縁の存在であるデーモンの回心には、〈物質性の否定→宇宙の展開の転倒〉の意味と重なるようにして、事実上の旧社会秩序の否定・転倒の意味も含まれるのである。ここに第3章の王の法の問題がつながる。ブグダは師であるとともにやはり王なのである。知に導かれる全く新しいヒエラルキーにのつとる新しい世界の王なのである。王子に生まれながら出家し悟った者である彼にあって、クシャトリヤ性とバラモン性が一つのもものとなって、新しい王の像を形成している。そしてその新しい正統・新しい理想の形成・提示の足場、要の装置となっているのがヤクシャなのである。

第5章。ここでは女性のヤクシャであるヤクシーを扱っている。ヤクシーは肯定的な扱いの上では、美しい豊穰性と官能性を示す。そして否定的な扱いにあっては、その恐ろしい誘惑と食人の性質がクローズアップされる。この二面は同じ性質の裏表と言えよう。その豊かな物質性は恵みにも脅威にも転換しうるのだ。ヤクシーはアンビバレントな存在で、この転換がしばしばありうる(ヤクシャの特徴がより鮮明に表れているのだ)。子供を愛する←→喰う。男を愛する←→喰う。病を直す←→引き起こす。この恐怖をよぶ像にはインドにおける女性への潜在的恐怖感が反映している、という指摘がされている(やや紋切り型か?)。ともあれ、この過激に転換しうる像ゆえに、ヤクシーもまた正統の権威づけの、有効な装置となり得たのであった。

第6章。長い歴史、広い文脈にわたるヤクシャ追跡の一応の大団円として最後に示されるのはヤクシャ像の特殊な完成型、カーリダーサの『メーガドゥータ(雲の使者)』の詩的なヤクシャ像である。著者は、詩もまた“ポピュラー”な文化の文脈の延長線上にあるはずで、ヤクシャの像を追うにあたって決して不適切な対象ではないはずだ、とした上で分析にあたっている。ここで

はヤクシャが単なる装飾のように引っぱり出されるのではなく、押しも押されぬ主人公、話者として、主体として登場している。そしてそのヤクシャ像は美的、詩的で優しく、官能的である。ヤクシャに内包されるデーモン性、負の要素の扱いには様々の可能性が示されてきたが、カーリダーサは美化によって美しく詩的にこの問題を解決してみせたわけである。

*

以上、実に広い時間と範囲にわたるヤクシャの問題をまとめあげた力技を大いに楽しんで読んだのだが、やはり一方で中心軸を見だしにくいいだちを感じたのもほんとうのところだ。

広い射程を持つこの書の中心軸は、おそらくヤクシャというマイナーな神格をインドの正統文化形成の“装置”と見てとらえ直す、という試みであったように思う。第1, 2章を基盤に、第3, 4章でヤクシャを「正統」の問題の領域、インド思想史の中心軸に一気に引っぱり込んだ手際は実に鮮やかだ。「デーモンニッシュな存在、周縁的な存在が、対決を通して正統の強化に役立つ」という構図は全然目新しくない。これがそれなりの説得力を持つにはそれなりの議論が必要だ。その点、<水の両面性の主張→ヤクシャとヴァルナの類比→ヴァルナの位置づけの変化の問題の核としてのリタの両面性の主張→王のダルマの問題>と展開する論の流れなどは、うまくヤクシャ問題を正統の問題の文脈にのせているように思う。<クベラとの類比→血の問題・物質性の問題→王のダルマの問題・仏教の理想の問題>という流れもおもしろい。仏教に関しても、その独特の否定的な宇宙論と社会変革性の側面から「ヤクシャの回心」を見ることで、それが仏教思想の根幹の理想の形成・提示にいかにか深く関わっているのかを解きあかして見せている。

*

が、このような鮮やかさの感じられない試みも多くあった。そのひとつが、O'Flaherty のインド思想史構想へのリンクの試みだ。O'Flaherty はインド思想史を大きく三段階に区切る。「供犠」の段階、「苦行」の段階、「バクティ」の段階、である。それぞれの段階によって至高のものも所在や、それに対する人間（や下等な存在）の関係、アプローチの可能性がちがってくる。「供犠」の段階では、神と人とは供犠によって媒介されるのみで、根本的に隔絶している。悪も神=善と隔絶し、対立している（デーヴァとアスラの対立など）。この秩序を崩し儀礼の清浄を汚すことが何より悪とされる。悪は外在的である。一方「苦行」の段階では、世界は本来一神に帰すべきところがマーヤーによって展開しているものなので、苦行→悟りを妨げる惑いこそが悪とされる。悪は内在的で、外在的実在ではない、と言えよう。また、苦行を重ねれば人やデーモンも神の領域に行き着けるわけで、かつて悪とされた領域区分の侵犯がこの文脈上では積極的に行われることとなる。（「バクティ」段階については、本書の守備範囲外で、「供犠」段階とともにひとまとめに語られたりするくらいで独自の描写がなかったのでここでは触れない。）著者はこのような根本的な変化に沿って、様々な悪の定義-悪の諸相を抽出し、デーモンの問題を大きな思想史の流れに据えようとしている。

しかし、（私の読解力不足の可能性は多分にありはするが、それでも）この試みを一貫して読みとることは難しい。正統の形成とデーモンの問題の流れが、論の組みたて全体から浮かび上がるように構成されているのに対し、それに並行するのであろうこの O'Flaherty 思想史の流れは論の流れにうまく乗せられず、ばらばらと指摘されるに止まっている。また、O'Flaherty の概念が検証されずに無条件に利用されている、という印象も残る。著者なりの O'Flaherty の消化・昇華が

示されればこの書のなんとはなしの紋切り型の印象も消えたのではないかと思う。

*

そして、ローカルな小伝統への視線を獲得することで、大伝統を逆照射せんとするこの試みの弱点として、そのローカルな小伝統の実像の不明さがある。結局この書で扱われるのは、ヴェーダであり、叙事詩であり、プラーナであり、ジャータカである。これは極言すれば、存在していたのであろうと推測されるローカルな小伝統の、大伝統内に統合された結果の姿であると言えまいか。だとすればこれは一種のトートロジーであって、大伝統の文脈に取り入れられた旧・小伝統をもって、小伝統と大伝統の関係を語る、最初から結論が決定されている試みなのではないか、との懸念がわく。もちろんこれらの巨大な文献が統一的大伝統に貫かれているはずもなく、そこに小伝統とその統合の過程を読みとる可能性は十二分にあるはずだが、ならばそれぞれのテキストについてそれなりの背後関係の検証が求められてこよう。歴史性を切り落とした神話学と一線を画して共時的研究と通時的研究を統合せんとしているこの著者なればこそ、そういう要求ともそれなりに向かい合っただけのこととなるのではないかと思う。

また、図像学的アプローチに関しては、彼女のこだわりの割にはあまり新鮮な成果を感じられなかった。同じくこだわりを見せているシンボリズム論に関しても、シンボルのライフサイクルという概念を持ってヤクシャ・シンボルの展開を意識しているのは興味深かったが、一貫した論理は見出せなかった。本著作では、様々なモチーフから論をまとめあげ展開させる彼女の編集者の能力の鮮やかさに比して、そういう一個一個の根柢の部分の弱さが目についてしまったようにも思う。文字文化と造形文化の両面から、共時的・通時的に、マクロにもミクロにも、インド文化に迫ろうとしている著者の試みの一層の深まりを、心から待ち望む次第である。